

高野参詣道 (一)

今年、高野山が開創されて二二〇〇年にあたります。弘仁七年（八一六）嵯峨天皇から高野山の地を与えられた空海は、密教の修行道場として金剛峯寺を建て始めました。その後、弘法大師信仰の聖地として、また浄土信仰とも合いまつて多くの信仰を集め、千年以上も前から現在に至るまで幾多の人々が参詣に訪れています。また、平成一六年には熊野三山や吉野山、大峯山などとともに「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録され、人類共通の文化遺産として位置づけられ、十年を迎えました。

高野山へと登る主要な参詣道は、高野七口とも呼ばれ、慈尊院（九度山町）から高野山上まで一町、一里ごとに標識となる町石が立つ「町石道」が最も主要な参詣道として有名ですが、これに対して有田地方から高野山へ至る参詣道も古来より存在し、「裏街道」とも呼ばれています。有田川町内にも参詣道が存在し、その多くは現在の生活道として整備拡幅され、古道の雰囲気を残していませんが、路傍に残された道標や石仏が当時の面影を今に伝えています。

この内、湯浅方面から高野山へ至る参詣道は、湯浅町境から県道吉原湯浅線沿いに東へ進み、町道との交差点を左に分岐し、土生方面へと坂道を登りますが、かつての古道沿いに建てられていた道標が、道路拡幅に伴い現在地へと移され、お祀りされています。この道標は、小字名から「出合の地藏さん」と呼ばれ、高さ七十センチほどの自然石の中央に、地藏尊が浮き彫りにされています。表面には「右むらなか道、左いせか（こ）うや道 利右衛門」とあり、裏面には宝暦三年（一七五三）九月という建立年代が彫られており、この道がかつての伊勢・高野山参詣道の一つであったことを知ることができます。

車で移動することが多い現代社会では、道標などにも気づきにくい存在ですが、お近くにお立ち寄りの際は、見学してみたいかがでしょうか。

